

## 郷土館だより

V o l . 13. No.2

1991. 3. 15



## ふるさと講座

伊豆の伝統に  
触れる

女性を対象とした「ふるさと講座」は、今年は伝統の中の「衣」と「食」とりあげ、4回連続で実施し、20代から60代までの女性25人が参加しました。

この内3回は「衣の原点をさぐる」をテーマに、染色工芸家井上一雄氏（市内東本町）を講師に招きました。人類の衣生活の歴史から伊豆の手機てふしが衰退するま

での話を伺い、次いで毛糸紡ぎ、機織りあひら、茜染めの実習を行ないました。

又、最終回には「郷土の味」として、手打ちソバを作る実習を行ないました。裾野市葛山より勝又きんさん・勝又信子さんを招き、手ほどきを受けました。

受講した女性たちは、初めて触れる手機てふしや草木染の根気のある事、手打ちソバの力のある事などに、昔の人々の生活に思いをはせた様子でした。





### (1)「伊豆の手機と人々の暮らし」

(11月28日)

井上先生は、「糸の始まり」「染めの始まり」について豊富な資料を示しながら話されました。

暖をとるために身にまとった毛皮などに手が加えられ、糸を作り、色を染めていく、こうした衣生活の歩みを考察されました。(写真上)

次に、10数年前に行った伊豆の手機の調査を基に、永く受け継がれた農村地域の手機の技術がすたれていった過程を語られました。近代繊維工業の発達の前に、明治生まれのおばあさん達を最後の伝承者として、娘達に伝えられることもなく手機はほろんでいきました。

最後に、「手の技は心の技である」と言われ、手つむぎの糸・手織等、手を使った仕事のかげがえのなさを語られて話を結ばれました。

### (2)「糸の始まり…糸をつむぐ・織る」

(11月29日)

糸を作る原理は、昔も今も、手作業も近代的工場でもほとんど同じで、つむぎコマ(スピンドル・紡毛機)にかけ、よりをかけて糸にします。

井上先生より、世界中に残る手つむぎの風俗が紹介された後、スウェーデンで盛んに行なわれているつむぎコマによる毛糸つむぎの実習に入りました。

洗った原毛をハンドカードにかけて、毛筋をととのえた後、つむぎコマを回しながら毛糸にします。すぐに細くなって切れてしまい、長い毛糸にするには熟練がいるようでした。

次いで機織りの実習に入りました。

井上先生の「カラリ、トントン」というリズムカルな手さばきを見た後、受講生も3台の機に取り組みました。

初めての機織りだけに、籽を落したり、足を踏み違えたり、まごつきました。しかし周囲が「右、次は左」と声をかけ励ましあい、どんだん布が織れました。

### (3)「染めの始まり…アカネで染める」

(12月6日)

茜染めは、草木染めの中でも最も手間がかかり難しいものです。今年は西洋茜の根を粉末にしたもの(クラブ)を使い、毛糸のアカ染めに挑戦しました。

まず染液作り、クラブを煮出します。

毛糸は中性洗剤で洗い脱水しておきます。媒染剤(塩化第一スズ)を溶かした液が30℃になったら毛糸を入れ30分ほど煮、放冷してぬるま湯で2回ほど洗い脱水します。(先媒染)

いよいよ染色です。染液を30℃にあたため媒染した毛糸を入れます。煮沸させて30分煮ますが、この間、色ムラにならないよう静かにかきまぜます。そのまま放冷し、30℃のぬるま湯で2回洗い、脱水し日陰で干します。

染め上がった毛糸は、夕日に映える美しいアカネ色となり、皆一日の苦勞が報われました。



### (4)「郷土の味…手打ちソバを作る」

(12月13日)

初めに郷土館学芸員より、裾野の手打ちソバの風習やソバの分布等の話を聞きました。

次いで、講師の勝又きんさん・勝又信子さんの指導でソバ作りに入ります。

水を一切使わず、小麦粉、ソバ粉、山芋、玉子だけでこねます。この生地をのし棒を使い台の上でのばします。のばし方が勸所の一つで、均一の厚さに薄くのばすのが難しいようでした。

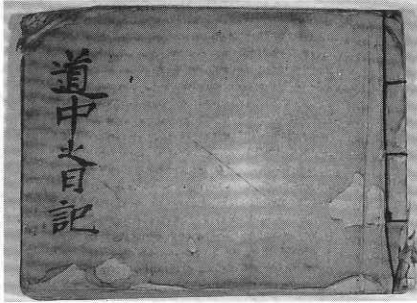
充分にのばした所で、打ち粉をしてたたみ、そば切り用の包丁で同じ太さに切ります。

たっぷりの湯で、打ちたてのソバをゆがき、勝又家風つけ汁(にんじん、しいたけ、鳥肉入り)でいただきました。

受講生もソバ打ちに挑戦しましたが、乾燥してボソボソになったり、薄く伸びずうどんのようになったり、苦勞しました。しかし、腕に自信をつけた人も多く、家でもソバ打ちをしようと意気込んでいました。(写真上)

# 伊勢参りの旅

～伊豆佐野村、勝俣花岳の『道中之日記』（嘉永6丑年・1853）より～



## 伊勢参宮

伊勢神宮は、古代に於ては皇室の氏神とされていたから、私人が奉幣することは禁じられ、一般の信仰の対象とはされなかった。しかし平安末期から私幣禁断制も緩和され、全国的に伊勢信仰が広まりを見せ始めた。中世に入ると、諸国の武将・豪族間には、伊勢神宮を全国の神々の祖神とするような神国思想が起っている。殊に、源頼朝などの東国武将には伊勢信仰が深く浸透している。室町・戦国期になると、伊勢の御師達の活躍もあって、伊勢信仰は更に広く深く諸国のあらゆる階層の間に浸透し、「神宮へ行かない者は人間の数には加えられない」とまで言われるようになった。17世紀半ば以降からは、日本中から庶民が伊勢参宮の旅に出るようになった。

「一生に一度は伊勢参宮を」というのが人々の願いだったという。

これから紹介する旅は、庶民の旅がもっとも盛んだった幕末の頃の伊勢参宮記である。

一冊の旅日記がある。筆者は勝俣花岳。江戸末期の人で伊豆佐野村の人。明治期の当地域の俳諧の中心人物の滝の本連水の父親でもある。俳句や歌を詠み、文章を作ったりすることは得手だったようである。旅日記には全旅行日程が細大もらさず記されているほか、俳句や和歌で旅の印象を的確に表現している。特に興味を引かれるのは旅日記の最後にまとめられている道中費用覚である。日程順に、費用項目を立て、それぞれ銭何文（あるいは金で何朱何分）を費したかを詳細に記録している。これは、江戸時代の庶民の伊勢参りの旅で、一人の旅人が幾らくらい費用をかけたかという点を知る上に絶好の史料である。も

ちろん花岳がどんな旅を楽しんだかという一般的な興味も大いにある。ここでは花岳の『道中之日記』から「道中費用覚」を表に整理してみた。また、旅の行程を地図に描いてみた。地図を眺め、表を読んで、花岳の旅を追ってみようと思う。

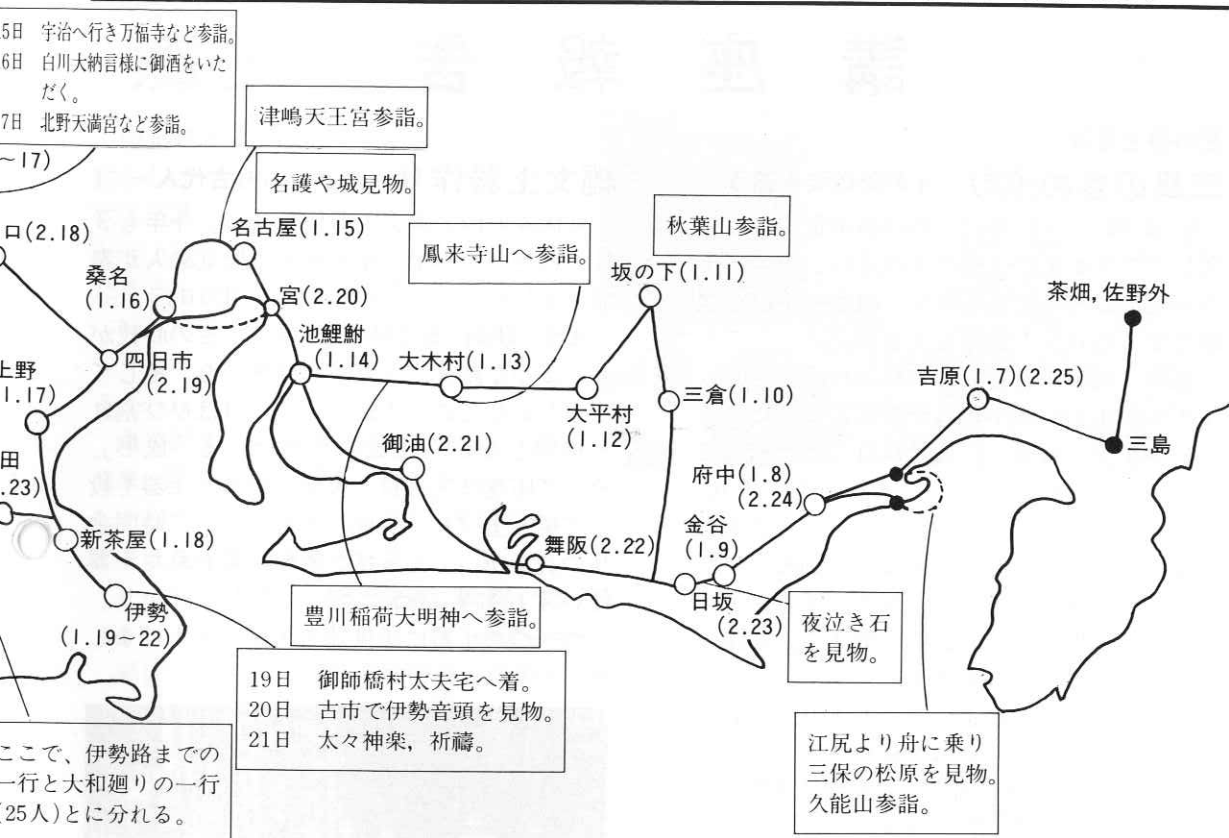
ところで花岳の参加したこの旅は、茶畑の柏木甚太郎を講親として組織された同行者45人の伊勢参宮道中だった。一行は茶畑、麦塚、公文名、久根、二ッ谷、石脇、嶋田（現在の裾野市南部地域）の村々の者が大半を占め、それに納米里（現在の長泉町）、間門（現在の沼津市）、伊豆佐野（現在の三島市）の村からの若干名が加わって構成されていた。伊勢講の組織が、かなりの広域にわたって構成されている点が注目される。また、旅の参加者を調べてみると、各々がそれぞれの村を代表する有産階級の者たちであることが判明した。やはり、これだけの旅を決行するには、それなりの貯えが無ければ可能にはなり得ないものであろう。現在でも、この旅の参加者の何人かの子孫に当ることが出来るので、この旅についての言い伝えか記録等が何か収集出来ないものかと思う。

さて、旅の出発は嘉永6年（1853）丑年正月7日である。この時期に出発する一行は多かった。すなわち、この時期は農民にとってはもっとも閑な時だ。田には麦が育ちつつあったが、春の彼岸ころまではそう重要な作業はなかったのだ。また、彼らの多くは地主クラスで、それほどあくせくする必要も無かったこともある。こうして全日程48泊49日の伊勢参りの旅が始まった。一行の集合場所は沼津宿の橋本屋。45人（花岳は47人と記しているが記録された講員を数えると45人になる）そろっての旅立ちだった。花岳は浮島が原にさしかかった所で、さっそく浮き立つ心を「春の日に打揃ふたるもの参り心はここに浮島が原」と詠んでいる。

以下は省略するので、表と地図をご覧ください。

一行の旅の終りは2月26日のことだった。三島宿大和屋善蔵方にて盛大な祝宴を開いた後、馬でそれぞれの村まで帰っている。





5日 宇治へ行き万福寺など参詣。  
 6日 白川大納言様に御酒をいた  
 だく。  
 7日 北野天満宮など参詣。  
 ~17)  
 口(2.18)  
 桑名 (1.16)  
 四日市 (2.19)  
 上野 (1.17)  
 田 (2.23)  
 新茶屋 (1.18)  
 伊勢 (1.19~22)  
 ここで、伊勢路までの  
 一行と大和廻りの一行  
 (25人)とに分れる。

津嶋天王宮参詣。

名護や城見物。

名古屋(1.15)

鳳来寺山へ参詣。

秋葉山参詣。

坂の下(1.11)

茶畑、佐野外

吉原(1.7)(2.25)

三島

宮(2.20)

池鯉鮒(1.14)

御油(2.21)

大平村(1.12)

三倉(1.10)

府中(1.8)  
(2.24)

金谷(1.9)

日坂(2.23)

豊川稲荷大明神へ参詣。

19日 御師橋村太夫宅へ着。  
 20日 古市で伊勢音頭を見物。  
 21日 太々神楽、祈禱。

夜泣き石  
を見物。

江尻より舟に乗り  
三保の松原を見物。  
久能山参詣。

—— 陸路  
 - - - - 海路  
 ○ 宿泊地  
 ( )の数字は宿泊日

道中費用覚(○印は宿泊地)

月日	正月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	正月
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
場所	吉原	三島	茶畑	佐野外	坂の下	三倉	大平村	御油	舞阪	府中	金谷	日坂	名古屋
費用	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
使途	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟	舟
旅籠屋	三島	茶畑	佐野外	坂の下	三倉	大平村	御油	舞阪	府中	金谷	日坂	名古屋	三島

# 講座 報告

## 夏の郷土学習

### 三島の水めぐり—水の都の姿を追う—

「水の都」と言われた三島の湧水量が減って久しくなりますが、今の子供達に、かつて市内を縦横に走っていた河川・用水の特徴を理解してもらおうと実施しました。

講師に郷土館運営委員の秋津亘氏を迎え、4年～6年の小学生13人が参加しました。

酷暑が少し収まった8月14日、郷土館にて三島の河川や水路のなりたちの話を伺った後、三島の水路めぐりに出かけました。小浜池・白滝公園という水源から始まり、御殿川・広瀬川・千貫樋用水をたどり歩き、用水路のポイント（水門など）の説明を聞きながら南下して温水池にたどり着きました。

およそ10km近くの道をメモをとりながらの学習でした。後に夏休みの研究として発表した子供もおり、「水の都」の姿が次の世代に語り継がれることを期待します。



### おかざり作り講習会

年も押し迫った12月9日、講師に兼子啓助氏（菰山町）、西家正勝氏（長泉町）を迎え、25人の市民が、おかざり作りに挑戦しました。

基本的なワラの扱い方でできる「のし」から始め、「荒神」「玄関かざり」を製作しました。

教えるのは初めてという両講師でしたが、明るく楽しい雰囲気の中で、日大教授の米人女性をはじめ、全員、端正な玄関飾りを完成させました。



### 縄文土器作り—ボクたちも古代人—

夏休み恒例の縄文土器作り教室、今年も3日にわたり、小学4年～6年の児童30人が参加しました。（7月24日、26日、8月22日）

まず、映画「縄文時代」を見て、この時代がどのような時代だったか知りました。そして汗水たらしての「土ねり」。二日目はひび割れと格闘しながら土器の形をつくる「成形」。そして圧巻は三日目、火焰の中に、土器を投じて焼き上げた「焼成」でしょう。二時間余りの炎をかいくぐって、灰から現われた土器はいずれも劣らぬユニークなものばかり、一つ一つの土器に子供達も大歓声を上げました。



# 郷土館講座

郷土館講座4回のうち3回は、「歴史を動かした人々」をテーマに「太平記の時代と三島」・「北条早雲」・「江川担庵」をとり上げ、専門の先生方に講演していただきました。

時代の変わりめにおいて、伊豆が変革を先取りした重要なポイントになっていることに気づきました。

最終回では、開催中の企画展「石と生活展」関連講演として、「伊豆を中心とした石の民俗」の講演でした。(受講生60人)



めの「中世の自由」を求める精神ととらえている。

この時代の三島には、三嶋大社への祈願状、寄進状、宝鏡院に残る二代將軍足利義詮の墓、南朝の尊親親王の滞在等、いくつかの痕跡が残っている。しかし、三島や伊豆の勢力がどのように動いたかは、漠然としてわからない。

## (3)「江川担庵」

三島北高教諭 仲田正之氏  
(12月1日)

江戸末期の葦山代官、江川担庵公(太郎左衛門)は領民から慕われた有能な代官であり当代一流の蘭学者、外交官、芸術家、軍学者、教育者であった。

仲田先生は、多才な担庵像をビデオ資料も用いて、わかり易く講義された。特に、すぐれた人材を登用するうまさと有意義なものはどしどし実用化していく実行力を高く評価されている。(写真上)

## (4)「伊豆を中心とした石の民俗」

日本民俗学会評議員 木村博氏  
(平成3年1月5日)

伊豆石の歴史的背景と民俗学的な特徴を、企画展展示にも触れながら語られた。

「伊豆石」は、江戸時代から明治にかけ盛んに切り出され、江戸城の石垣を始め江戸の町の景観を作ってきた。江戸の石造文化は伊豆と関係が深い。

又、信州の「高遠石工」は旅稼ぎの石工として有名であるが、伊豆には比較的高遠の石工は少ないようである。このことを道祖神の形態分布から、くわしく分析された。(写真左)

## (1)「北条早雲の戦略と経営」

郷土史家 永岡治氏  
(10月6日)

戦国大名の雄、後北条氏の祖、北条早雲をとり上げ、その波乱の半生を語られた。

北条早雲は、あまりよい評価を得ていないが、実は一代の英雄と呼ばれるにふさわしい人物である。

妹の子が、今川氏の後継者(氏親)となったことから、政治的力を持ち始め、57歳にして、興国寺城(沼津市愛鷹)の城主となる。

この後、伊豆・相模を次々と攻略し、平定していったが、その攻略方法は熟慮と準備に富んだものであった。

## (2)「太平記の時代と三島」

三島市文化財保護審議委員 長谷川福太郎氏  
(11月3日)

太平記の時代(建武の新政～南北朝にかけて)を表わす言葉として「バサラ」をとり上げ、悪い意味だけでなく、乱世を生き抜いた



# 福井県三国町

## 郷土資料館視察

郷土館の職員などが、この程、今後の教育行政推進に役立てようと福井県三国町郷土資料館を視察しました。

その概要を報告するとともに今後の郷土館の運営に生かしていくことといたします。

### 【概要】

- 規模…鉄骨鉄筋コンクリート造3階3,956㎡
- 職員…9名（説明案内係4人を含む）
- 入館者数…約6万人（町民7千人、観光客5万3千人）人口24,000人
- 開館…昭和56年11月1日
- 開館までの経過

古くより湊町として栄えた三国町の文化遺産を守り後世に受継ごうということから、昭和48年準備委員会（学識者7人）が発足。昭和50年より本格的資料収集および調査に取り組む。湊の歴史を中心とした総合博物館的展示構成による基本設計を昭和54年に作成。なお建築様式は、明治時代に在った擬洋風の五層八角をした竜翔小学校の再現様式とした。

昭和54年建築起工し昭和56年完成。総工費12億円（展示工費を含む）展示内容は、展示の基本・実施とも専門業者へ委託。また、大学・高校等の先生に展示部門別監修を受けている。

### 【常設展示】

千石積ベサイ船5分の1模型を配したイントロダクションに続き7つのテーマにわけて構成している。

- ①「三国の自然」は、海、砂丘、台地、平野とバラエティに富んだ自然環境に恵まれた三国町の容姿を紹介し②の「三国のあけぼの」で、考古資料を通して、その自然を背景とし



た先人の営みを考察している。③「三国湊の発展」④「三国のにぎわい」⑤「三国港の変貌」は、古来より越前の物資輸送の基地であった三国湊の歴史を北前船に関する資料を中心に展示説明している。

⑥の「三国と近代文学」は三国とゆかりの深い三好達治等、について作品や遺品を並べ、⑦「三国のくらし」では下駄屋等の仕事場を復元している。三国の歴史を語る資料が近代的な感覚でテーマ別に展示されており、また展示内容に関する解説案内を行い入館者へのサービスに努められている。

### 【企画展示】

春と秋に2回開催。春は館蔵品展

○教育普及活動は、公立7公民館にて種々講座を設け公民館活動の中に取込み郷土資料館は、常設展示を主体としている。

○管理運営の予算約年間5,000万円。この中には観光の拠点としての位置を担っていることから広告宣伝費を予算計上。また館蔵品の新規購入も予算化されている。

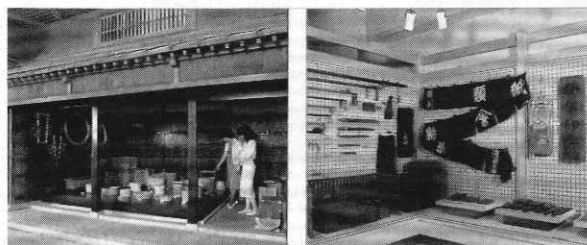
○今後の計画として約5億円かけて若干の施設補修と近代的な映像情報を取り入れた常設展示替えを2～3年後をめどに準備中である。

### 利用案内

休館日 毎月第2月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料（但し、楽寿園入園は、有料）



郷土館だより No.39

平成3年3月15日発行

（年3回発行）

編集 三島市郷土館  
住所 〒411 三島市一番町19-3  
TEL 0559-71-8228  
発行 三島市教育委員会